多摩アマビ会報

発行２０１４年7月26日　第１２９号
NHK 多摩アマチュアビデオクラブ
電話０４２－３６１－５６８４

魅力あるビデオ作品を制作するための７章

今年度の公開セミナーは、小林はくどう氏にお願いして6月 28 日(土)午後 1 時 30 分から 5 時まで、立川センタービルのNHK 西東京営業センター会議室で行われました。参加者数は58 名（当クラブ会員11 名、外部聴講者 47 名）でした。小林はくどう氏は大学教授、アマチュアビデオコンテスト審査員として有名な方で、映像制作現場で長いこと活躍され、この日はビデオ作品を上映しながら作品制作の勘所について項目ごとに説明されました。

・第１章：ビデオレターの考え方を大切に

撮るときに重要なのはビデオレターを作る気持ちで。気持ちをビデオに込めることによって伝わるものがある。
娘の結婚式で父親は黙ってビデオを撮るばかり。新郎とのツーショットがいつの間にか娘だけになってしまう。
父の嬉しい、そして寂しい気持ちがよく表れている。聴くより観る映像の方が心に残る。
ビデオは社会の窓であり鏡である。
「ユング４つの心の営み」論理、感覚、感情、直観。この４つが組み合わさっている。
おしゃべりをしながら撮影をする人がいて、意外と臨場感のある作品になっている。撮っている人と撮られている人がどんどん近づいている。プロっぽく撮るのが重要ではなく、人格を反映した作品の方が良い。
コミュニケーションとしてのビデオの機能には直接性、柔軟性、無前提性、個別性、機動性などがある。

・第２章：何に力点を置くのか

メディアリテラシー　情報を疑う力。これは本当だろうか？　何を言いたいのかな？　理解したけど、ほかの見方もないかな？　何が隠れているかな？　まだわからないなあ？
作品を構想するとき5W1H で考えるのが一般的だ。いつ when、だれが who、何を what、どこで where、どうして why、どのように how。特に“どうして”がすごく重要。このことを作者に考えてほしい。

・第３章：映像を通しての観察が直白い　映像言語

言語から非言語へ。
「バーバルコミュニケーション」　と「ノンバーバルコミュニケーション」の違い。
デズモンド･モリス　しぐさによる人間と動物の類似性の研究「マンウオッチング」は観察を切り口にしたもので、参考になる。
「社会の窓」　観察を通して発見する好奇心。
自分のテーマが見つからないとき、観察することで見つけやすくなる。意外なものでも視点を変えて観察することによって面白いものができる。

・第４章:：１人称単数「私」で考える

私たち(1 人称複数)、私(1 人称単数)。
「私達」の発想だと歴史、名所旧跡、広報探訪になり、解答を求めがちになりやすい。
「私」の発想だと自分との関わり、エピソードを中心に回答。様々な真実、人生、社会を表現する。
自分のエピソードなどに関連して、自分の考えが出しやすい。歳時物は記録映像的になりやすいが、本人の世界観を出したい。

・第５章:：ビデオジャーナリズム　社会へ発信しよう

市民ビデオジャーナリズムを発揮しよう。身近な社会学のキーワードを研究しよう。
1974 年ジョン・アルバートが小型ビデオカメラで単独取材し、オンエアーされた（ビデオジャーナリズムの先駆け）。
テレビニュース、広報番組を参考にするのはやめよう。

・第６章:：数学を使った構成に挑戦してみよう　演出には映像文法の公式がある

シナリオは音楽の楽譜　建築の設計図と同様である。(未分野の世界)
足し算だけでは面白くない。約分、因数分解、公式　囲碁将棋の定石に似ている。
モンタージュ（組み立て方、編集）は作品の組み立てを工夫することで面白くなる。モンタージュには回想、直列、交互、並列、比喩、象徴、対照、吸引などがあり、構成を凝らして作品の深みが増していく。
枷（カセ）は登場人物などに縛りをかけて物事の進行に引き込ませる。

・第７章：ドキュメンタリーとドラマの間

ドキュメンタリー、報道とドラマの違いは何か。ドキュメンタリーでも作為的に編集すれば真実と違ったものになる。ドキュメンタリードラマなども出現している。

終って　講師の熱弁で質疑応答の時間が無くなりましたが、作品制作の学術的裏付けなどが聴講できたと喜ぶ声が多く聞かれ、成功裡に終了しました。はくどう先生、ありがとうございました！

８月例会のお知らせ

８月２３日（土）午後１時３０分～５時

１ヶ月後は盛夏の猛暑となっていることでしょう。熱中症に気を付けて、再会しましょう。
秋の撮影会の相談もしたいですね。

（編集後記）
セミナー当日は雨にもかかわらず、大勢の受講者が参加しました。不慣れなこともあって機材の調整に不備はありましたが、皆さん熱心に聞き入っていました。さっそく今後の作品作りに役たてようと思います。

（荒木　勉　記）